

裏面の話題

みんなの居場所の裏面も、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、語、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和8年6月22日(月)

みんなの居場所

読書の個性について

梅雨の時期、読書には良い季節です。外での活動が制限される場合、読書はいいものです。その言葉は雑誌で見た話を紹介されてきました。それは「小学生や中学生は読書をすべきだ」という、読書のジャンルを分け、物語や説明文だけでなく、エッセイや詩集、果てはマンガまで、とにかく色々な分野の文章を乱読していいというものでした。大人は「マンガじゃなく字がいろいろ書いてある小説なんかを読みなさい。」などと言っていました。その雑誌の中で「マンガを読む子どもは」「マンガを読むな」というのは、逆効果と紹介されていました。その根拠は、読書家は殆どの場合、マンガもたくさん読んでいくのです。確かに私もマンガをたくさん読みました。それが高じて読書が趣味になったのかも知れません。そういう意味、私の読書を振り返ってみます。スタートはマンガではありませんでした。なんと、伝記です。1年生の時に父が買ってきた「野口英世」(ポプラ社)の伝記が始まりました。それからしばらくは伝記に凝りましたが、その後はマンガでした。野球に興味があった関係で、一時期「下力ハン」しか読みませんでした。しかし、そこからいろいろなマンガを読むようになり、例えば「釣りキチ三平」。私は本格的に釣りをしたことはないのですが、このマンガから大自然への畏怖や大切なことを感じることが出来ます。「お〜い龍馬」は好きな歴史上の人物が故にのめり込みました。100円で買える古本屋を探して、大人買いしてしまっただけのもあります。活字に触れる時間が長いと作文力も向上するのではないかと思います。

「子どもの習慣」を伸ばすために

教師は「教えないではなりません」という縛りから抜け出せないと、あるいは気が付かないうちに「教える」ことだけを行っている時がある。45分の授業の中で教師がずっと喋っている授業もある。このよきな場面を繰り返す。子ども達は受け身の姿勢になり、常に指示を待つようになる。思考力の高い子どもたちは「次はこうすればいいですか?」「次の指示を担任に仰ぐ。これは思考力が育たない。」「考えの習慣」を付けさせないといけない。授業や学習の中でも教師や親が答えを出してしまふ、話さない活動でも教師の大人の価値観を押し付けてしまふ「これはこうじゃない」「いや、子ども達の思考を切断してしまふことがある。子ども達の行動に変化が現れ、教師は取り返す術がなくなる。しかし、子ども達は思考していない。「自己解決力」が働いたのではないのである。我々大人がそれに気が付かない、子ども達は常に指示を待ち、教師は指示を出し続けなければならなくなる。そして「これだけやっておけるのよ」というて分からないうの。」「真のスパイラルに教師は疲弊してしまふ。

「子どもの習慣」を伸ばすために

子ども達に「考えの習慣」を付けさせるには自己能力を育み、我々大人にも時間的、精神的余裕がなくてはならない。後には任せたい。頼む。」この二語で、子ども達が自ら考え行動し、結果を出す、そして更なる課題を発見し取り組む姿を想像してほしい。主体的、協働的で深い学びにより、活字で働くスキルを「自ら学び取る」。本校はそんな姿を目指して日々の研究に取り組んでいこう。

「子ども」の心を育てる

運動会が終わると、私が担任していた学級は、夏休み中の2大イベント「キャンプ」と「ナイターハイク」に向かって動き始めます。梅雨の時期、目標を失ってしまつて問題が起ることも多々あります。私は夏休み中に行動目標を設定し、それに向けて活動が起るようになっています。2つの行事は、実施に向けて班編成、リーダーの設定、ルール作り、多々のやるべき事があります。その仕事の多さを子ども達が感じました。自治です。夏休み前の終業式を終え、他学年はホッと休んでいたところでしょう。しかし、私達は、行事実施に向けての活動が本格化します。2つの行事が終わるまで、殆どの子ども達が学校に来ます。宿題をするという、行事の準備の為ですね。でも、そんな時間を楽しく過ごしていた。前に進んでいる感じがしたのだと思います。子ども達は嫌な顔一つせず活動してました。キャンプやナイターハイク当日の様子はこれまでにお話ししましたので詳しくは述べませんが、行事一つ一つに主体的、協働的に取り組ませることが、充実した毎日を送るようになってました。その後、陸上記録会、玉名東地区音楽会(だったかな)、学級発表会、次に目標をクリアしていききました。特に私の心に残っているのが音楽会です。と言いますのは、当時、新型インフルエンザが問題になり、1人でインフルエンザが発生した場合、学級閉鎖の処置をとることになっていました。それが、当時の学級に降りかかっているとは思っていませんでした。確か、日曜日の昼間だったと思います。ある保護者から連絡が入りました。「息子がインフルエンザになりました。」何〜って感じでした。直ちに校長先生に連絡を取り、学級閉鎖の連絡を行うことになりました。しかしながら、音楽会は実施される訳で、学級閉鎖期間が終わつてすぐに実施予定となっています。音楽の苦手な私が他の先生方にサポートして頂きながら練習した曲です。子ども達も私も、できるならは出たいという気持ちでした。学級閉鎖が明けて、出席した子ども達の数、何と半分でした。子ども達に「どうするよお母さん」と聞くと、「二つ返事で「出ます」」しかし、学級閉鎖明けで半分も出席者がいる状態でも、悪い訳はないと思います。事務局にも相談して、演奏直前に会場入りし、演奏直後に会場を出るということになりました。私達が会場に入る、7時の音が起りました。学級閉鎖明けというだけでは情報として伝わっていません。曲目は「シンク・シンク・シンク」です。ビッグバンドジャズの人気曲ですね。ノリノリの曲の演奏をしながら、子ども達は自分達で考えたバンド名を頭に浮かべていました。その名も「ニュー・タム」(新世)です。みんな名前が浮かぶものです。多分、何が起つても「楽しい」ことを忘れなかったから、「思い出せ」を忘れなかったから、この名前が浮かんだのだと思います。その後、「ニュー・タム」は、地域でも学校でその演奏を披露する機会を得、人気のバンドになりました。(〇〇)